

福岡教育大学 障害学生支援センター

令和 4 年度

活動報告書

目次

1. 福岡教育大学 障害学生支援センターについて	
1-1. 支援体制	1
1-2. 支援学生数.....	2
1-3. 障害学生数.....	3
1-4. 障害学生支援センターの利用状況	3
2. 令和4年度 障害学生支援センター活動報告	
2-1. 視覚障害学生支援	4
2-2. 聴覚障害学生支援.....	5
2-3. 病弱・虚弱学生支援	7
2-4. 発達障害学生支援.....	7
2-5. 精神障害学生支援.....	8
2-6. 支援学生対象入門講座	8
2-7. テイク活動に関するアンケートの実施.....	9
2-8. バリアフリーマップの作成.....	9
2-9. 学生企画による手話の勉強会(しゅわ弁)	11
3. 啓発活動・セミナーなど	
3-1. 障害学生修学支援ネットワーク拠点校としての活動.....	12
3-2. 九州地区国立大学法人障害者支援に関する大学間連携プログラム.....	12
3-3. 九州地区国立大学法人障害者支援に関する大学間連携情報交換会.....	12
3-4. 令和4年度FDセミナー・研修会	12
4. 障害学生支援に関する授業担当教員アンケート調査	
4-1. 実施の目的.....	13
4-2. 方法.....	13
4-3. 結果および概要	13
5. 障害学生支援センター 令和4年度年間スケジュール.....	20

1. 福岡教育大学 障害学生支援センターについて

1-1. 支援体制

福岡教育大学での障害学生支援に関する組織は、平成 21 年 11 月に「障害学生支援室」として開設され、平成 27 年 8 月から「障害学生支援センター」として発展・拡充し、障害学生支援センターが中心となって、健康科学センター、大学教員、各担当部署、附属学校などと連携を取りながら障害のある学生の支援を行っている。

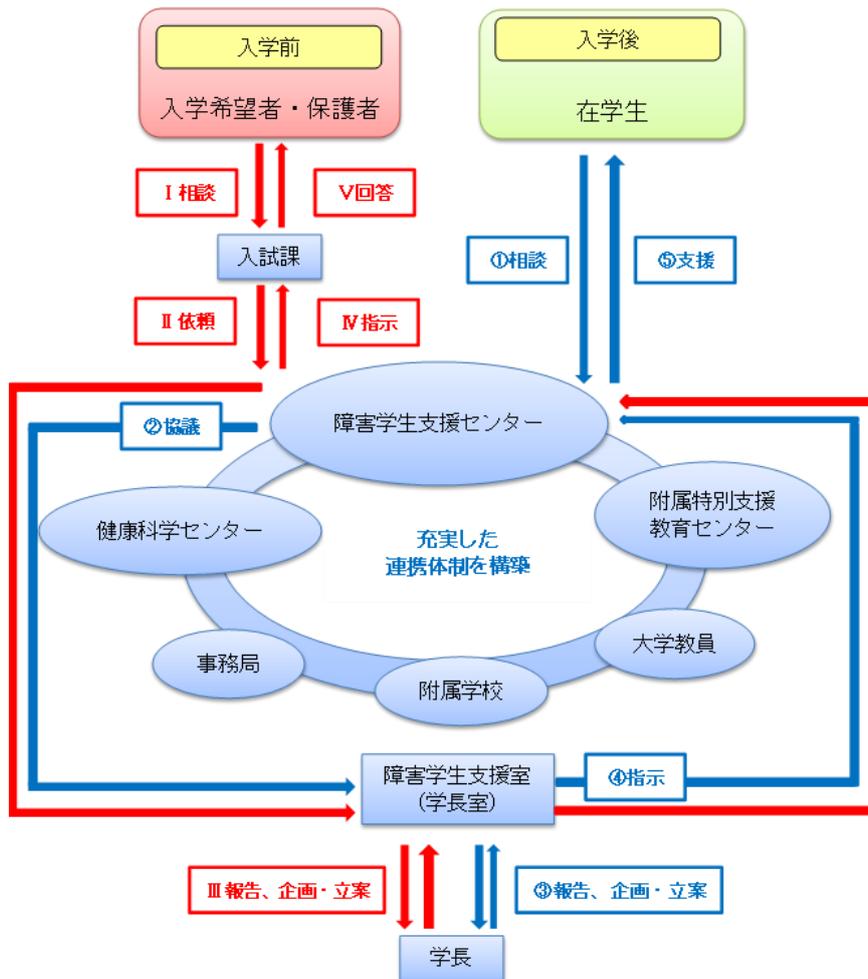


図 1-1 障害学生支援のための連携体制

【障害学生支援センター構成員】

- センター長 1 名
- 副センター長 1 名
- 専任教員 1 名
- 障害学生支援コーディネーター 2 名
- 事務補佐員 1 名

1-2. 支援学生数

令和4年度に障害学生支援センターの支援学生として登録した学生は69名であった。令和3年度(59名)と比べると10名増加している。

令和4年度に登録した支援学生の学年、所属は表1-1の通りである。

表 1-1 支援学生の学年・所属

学年			所属				
教職大学院	2年	2	教職大学院	初等教育高度実践力特別プログラム		2	
学部	4年	6	学部(4年生)	特別支援	中等	1	
	3年	24			初等	0	
	2年	18			初等	2	
	1年	19			中等	国語	2
	合計	69名				美術	1
			学部(3年以下)	特別支援	初等	10	
					中等	14	
					初等	31	
					中等	技術	4
						美術	1
					数学	1	
			合計 69名				

(令和5年3月31日現在)

※表内の数値は人数

※支援学生は本学の学生アルバイトである

1-3. 障害学生数

障害学生支援センターを利用する学生は、令和5年3月末現在、15名（視覚障害のある学生2名、聴覚障害のある学生6名、病弱・虚弱の学生1名、発達障害のある学生5名、肢体不自由のある学生1名）であった。障害種ごとの人数は表1-2の通りである。

表 1-2 障害学生数

	1年	2年	3年	4年	院	特専	合計
視覚障害		1	1				2
聴覚障害	1	3	1	1			6
病弱・虚弱		1					1
発達障害	1	2		1	1		5
精神障害							0
肢体不自由						1	1
合計	2	7	2	2	1	1	15

（令和5年3月31日現在）

※表内の数値は人数

1-4. 障害学生支援センターの利用状況

令和4年度の障害学生支援センターへの来室者数は年間で合計1557名であった（図1-2）。来室目的はパソコンテイク関係での来室が最も多く、その他の目的での来室、障害学生支援センターで管理しているパソコンの更新等の作業、文字起こしや字幕挿入作業、相談と続いた。

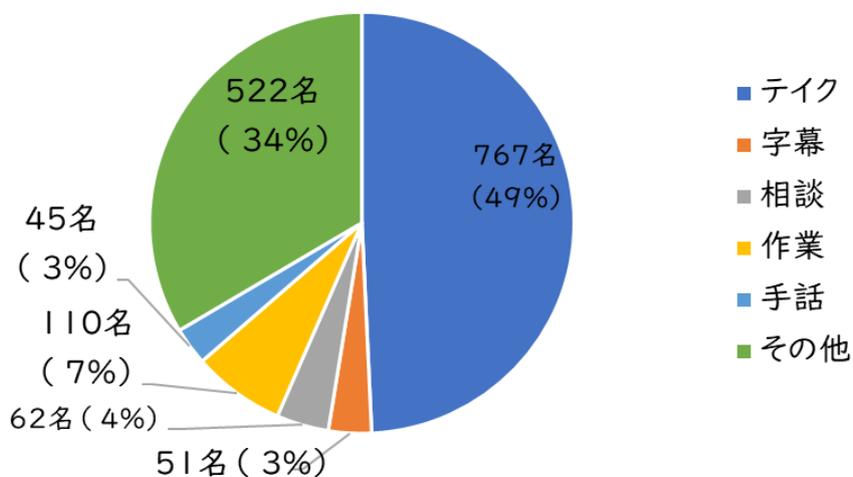


図 1-2 障害学生支援センターへの来室者数と来室の目的

2. 令和4年度 障害学生支援センター活動報告

2-1. 視覚障害学生支援

① 授業等の配付資料の電子データでの提供、拡大資料の作成

視覚障害のある学生が授業の配布資料を自身のタブレット端末に取り込み、適宜見やすいサイズに拡大して資料を閲覧することができるよう授業担当教員や支援センターから配付資料の電子データを提供した。また、学生から資料の拡大印刷依頼があった際は障害学生支援センターで拡大資料を作成し、学生に提供した。

② 支援機器の貸し出し

視覚障害のある学生の希望に応じて貸し出しを行った支援機器を表 2-1 にまとめた。

表 2-1 支援機器(視覚障害学生支援)

拡大読書器(据え置き・携帯型)

単眼鏡、各種ルーペ

各種スキャナ

立体イメージプリンター

点字PDA

VOITER(AIボイスレコーダー)

ICレコーダー

各種ソフトウェア

③ 授業担当教員に対する授業の際の配慮願いの送付

視覚障害のある学生が受講する授業の担当教員に対して、主な配慮点をまとめた文書を送付した。具体的には、講義で使用する資料の事前提供、単眼鏡や iPad 等の支援機器の持ち込みの許可、試験時の時間延長の依頼等を記載した。

2-2. 聴覚障害学生支援

① 授業での情報保障(パソコンテイク、ノートテイク)

聴覚障害のある学生が希望する授業にパソコンテイク(1コマにつき2~3名)を配置した。学生にはタブレットを貸し出し、無線LANを使用して教室内の離れた場所においても情報を得ることができる方法を採用し、自分の受講しやすい場所で受講をしたいという学生の要望に応えた支援を行った。遠隔授業実施に伴い、遠隔同時双方向型の授業の際は、遠隔による情報保障を行った。また、集中講義や教員採用試験特別講座、卒論発表会などの際もパソコンテイクを配置した。

令和4年度における聴覚障害のある学生のパソコンテイク配置授業数は、表2-2の通りである。

表2-2 パソコンテイク配置授業数

	前期	後期
利用学生A	—	2コマ/週
利用学生C	4コマ/週	6コマ/週
利用学生D	4コマ/週	8コマ/週
利用学生E	2コマ/週	2コマ/週
	入学式 教員採用試験のための特別講座 集中講義 卒論発表会 卒業式	

※利用学生Aについては、教員採用試験特別講座や卒論発表会等へもテイク配置

※その他、遠隔授業の際、不定期に遠隔テイク配置あり(利用学生B)

② 支援機器の貸し出し

聴覚障害のある学生の用途に合わせた支援機器の貸し出しを行った。パソコンテイクで使用するためのタブレットを聴覚障害のある学生1人に1台ずつを年間通して貸し出した。また、音声認識アプリの入ったiPadや、AIボイスレコーダーVOITER等を聴覚障害のある学生に貸し出した。

③ 授業動画の文字起こし

令和4年度は前年度から引き続き遠隔授業実施に伴い、授業で使用する動画や音声付きパワーポイントなどの文字起こし依頼が多数あり、合計132本であった(図2-1)。

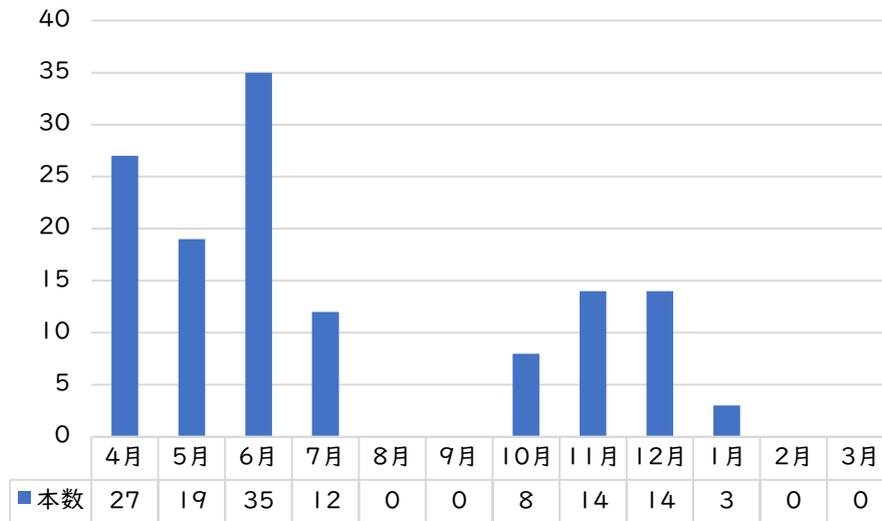


図 2-1 文字起こし依頼本数

④ 視聴覚教材への字幕挿入

聴覚障害のある学生が受講する授業で使用する視聴覚教材に字幕を挿入し、作成した視聴覚教材は図書館で管理した。

令和 4 年度に字幕挿入した視聴覚教材は合計 3 本で、37 分であった(図2-2, 図2-3)。

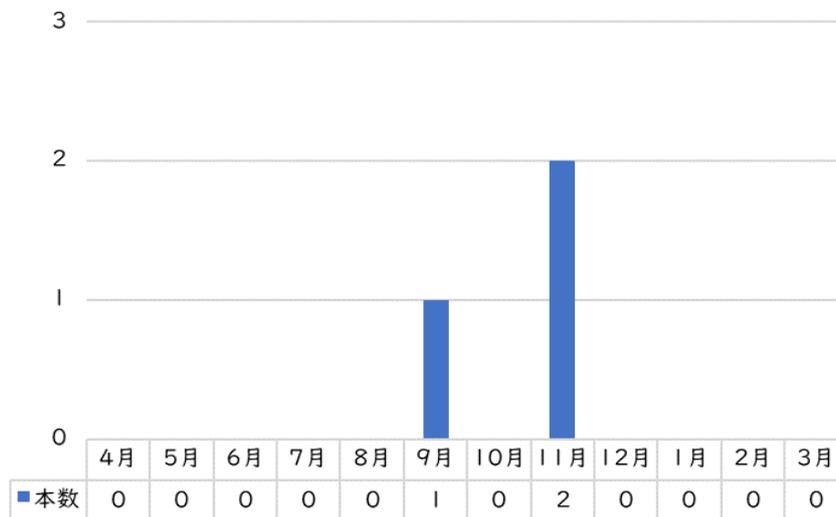


図 2-2 字幕挿入依頼本数

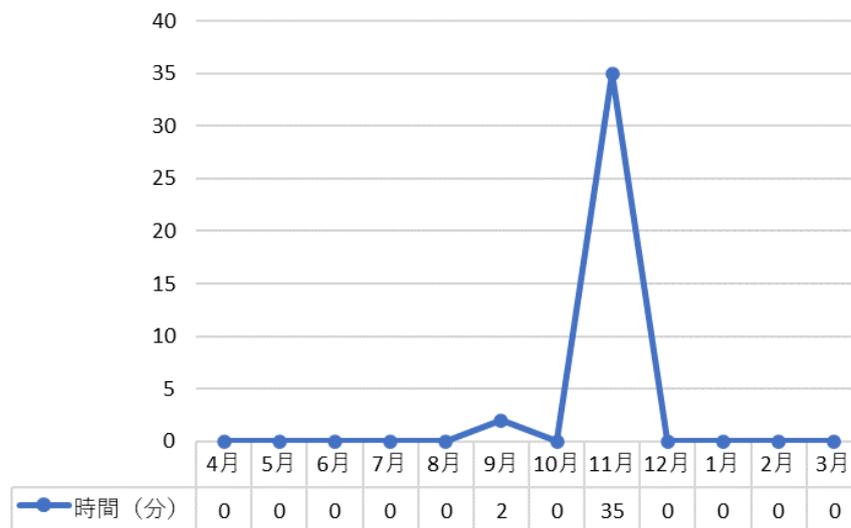


図 2-3 字幕挿入時間

⑤ 授業担当教員に対する授業の際の配慮願いの送付

聴覚障害のある学生が受講する授業の担当教員に対して、主な配慮点をまとめた文書を送付した。具体的には、視聴覚教材を使用する際の事前申請、パソコンテイクの配置およびパソコンテイクへの資料提供の依頼を記載した。

⑥ 式典での情報保障

式典において、聴覚障害のある学生だけでなく、式典に参加される保護者等のためにパソコンテイク(支援学生)を配置し、スクリーンに文字情報として投影した。また、福岡県手話の会連合会に手話通訳者派遣の依頼をし、パソコンテイク・手話通訳により、誰もが式典の内容を理解できるような情報保障を行った。

2-3. 病弱・虚弱学生支援

① 授業担当教員に対する授業の際の配慮願いの送付

病弱・虚弱の学生が受講する授業の担当教員に対して、病弱・虚弱の学生の症状・ニーズに合わせた、主な配慮点をまとめた文書を送付した。

2-4. 発達障害学生支援

① 授業担当教員に対する授業の際の配慮願いの送付

発達障害のある学生が受講する授業の担当教員に対して、主な配慮点をまとめた文書を送付した。

2-5. 精神障害学生支援

① 授業担当教員に対する授業の際の配慮願いの送付

精神障害のある学生が受講する授業の担当教員に対して、主な配慮点をまとめた文書を送付した。

2-6. 支援学生対象入門講座

障害学生支援センターでは、支援学生として登録した学生に対して、入門講座を行っている。入門講座は1講座あたり1時間半程度で、講師は支援学生として実際に活動する学生が担当している。

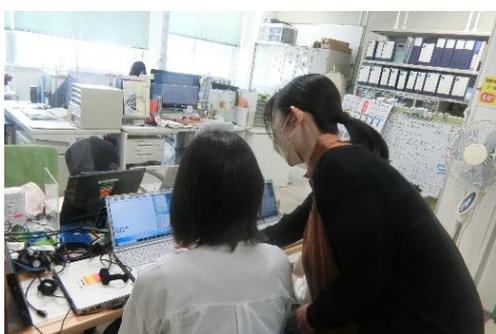


写真 2-1 入門講座の様子

令和4年度のノート・パソコンテイク入門講座、視聴覚教材字幕挿入入門講座の実施回数および人数は以下の通りである。

○ノート・パソコンテイク入門講座 14回

1回の講座に1~2名程度の学生が参加し、合計23名の参加があった。

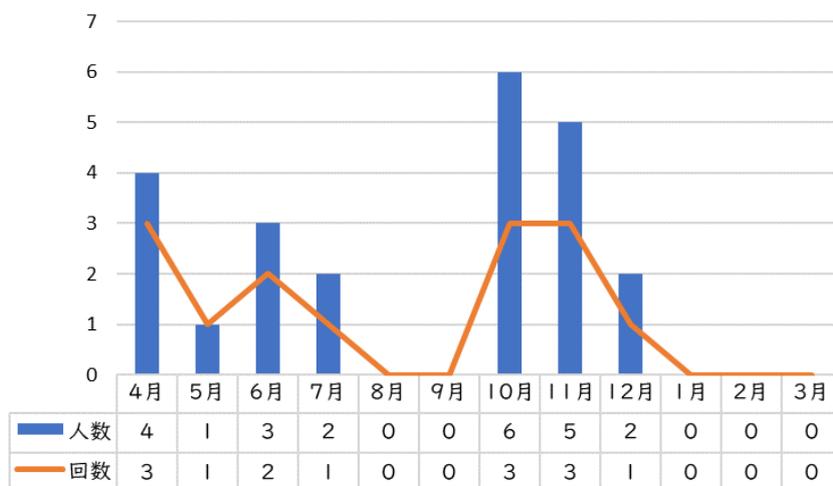


図 2-4 ノート・パソコンテイク入門講座実施回数・人数

○視聴覚教材字幕挿入入門講座 17 回

1 回の講座に 1~2 名程度の学生が参加し、合計 23 名の参加があった。

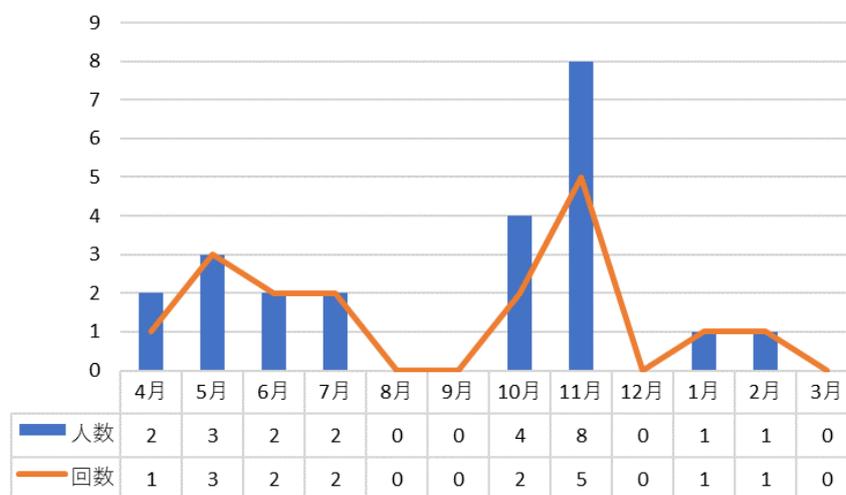


図 2-5 視聴覚教材字幕挿入入門講座実施回数・人数

2-7. テイク活動に関するアンケートの実施

前・後期終了後にテイク活動に関するアンケートを実施した。その学期に行われた支援活動に関する反省や支援をする際に難しかったこと、その改善点などについて情報共有を行った。

アンケート結果より、利用学生からは授業における情報保障を受けてみて、授業中の話の内容がわかりやすくなったとの声が聞かれた一方、テイクに関する具体的な要望も挙げられた。パソコンテイクからは、実際テイク活動を行っている中で工夫した点や難しいと感じる点、改善点などの意見が挙げられ、他のテイクと共有した。

また、パソコンテイクの技術向上を目的としたタイピングチェックを適宜行い、円滑な支援活動を行うことができるよう工夫した。

2-8. バリアフリーマップの作成

平成 26 年度より支援学生による大学内のバリアフリー状況調査およびバリアフリーマップの作成を行っている。令和 4 年度は、打ち合わせやバリアフリーマップの改訂作業等を、社会情勢を鑑みながら行った。また、作成されたバリアフリーマップは、学内各課へ配布し、入学式の際に新生全員に配布され、障害学生支援センターのホームページ上にて随時更新している。

2-9. 学生企画による手話の勉強会(しゅわ弁)

例年、学生企画による手話の勉強会(しゅわ弁)を開催しており、講師となる学生がプログラムを考え、回ごとにテーマを決め、テーマに沿った手話表現を使ってコミュニケーションをとるなどの活動を行っている。令和3年度は新型コロナウイルス感染症拡大防止のため実施しなかったが、令和4年度から状況をみながら再開した。

3. 啓発活動・セミナーなど

3-1. 障害学生修学支援ネットワーク拠点校としての活動

福岡教育大学は独立行政法人日本学生支援機構障害学生支援ネットワーク九州・沖縄地区の拠点校として、障害のある学生に関する相談・見学の申し込みを受け付け、情報提供等を行った。

他大学等からの相談受付 4件(大学 4件)

見学 1件(就労移行支援事業所 1件)

3-2. 九州地区国立大学法人障害者支援に関する大学間連携プログラム

令和4年8月26日(金)

オンライン開催

九州地区国立大学法人障害者支援に関する大学間連携プログラムがオンラインにより開催された。今年度は「つまってもつまずかない世の中へ～正しく知ろう!吃音のこと～」をテーマとし、本学から支援学生および教職員が参加した。

各大学からの活動報告の後、吃音に関する講話、グループワークが行われ活発な意見交換が行われた。

3-3. 九州地区国立大学法人障害者支援に関する大学間連携情報交換会

令和4年12月16日(金)

九州工業大学

九州地区国立大学法人障害者支援に関する大学間連携情報交換会が九州工業大学で開催され、本学から教職員が参加した。今年度は福岡県内の4年制の公立大学、私立大学がオブザーバーとして参加した。

各大学の障害学生支援における課題や対応について共有された。また、グループワークでは、障害を理由とするオンライン授業や出欠の取り扱いに関する合理的配慮について意見が交わされた。

3-4. 令和4年度FDセミナー・研修会

令和5年1月26日(木)

ハイフレックス開催

「FDの背景としての障害学生支援—合理的配慮の再確認—」をテーマとして実施した。本学の障害学生支援の体制と発達障害のある学生に対する授業における合理的配慮について説明した。

4. 障害学生支援に関する授業担当教員アンケート調査

4-1. 実施の目的

今後の障害学生支援活動の充実や方向性を検討するため、障害のある学生が受講する授業の担当教員へアンケート調査を実施し、障害学生支援センターで提供している合理的配慮や取り組み状況について検討した。

4-2. 方法

令和4年度前期・後期において本学で開講された授業のうち、障害のある学生が受講した授業の担当教員139名(常勤82名,非常勤57名)を対象に、令和5年1~2月にかけて、郵送及びGoogleFormsによるアンケート調査を実施した。そのうち、51名から回答を得た(回収率36.7%)。なお、回答者は常勤教員25名(30.5%)、非常勤講師26名(45.6%)であった。

4-3. 結果および概要

各質問項目の結果は以下の通りである。

「問① 担当した授業(障害のある学生が受講した授業)について」

担当した授業における障害のある学生の障害種(複数回答)を尋ねたところ、視覚障害19件(29.7%)、聴覚障害29件(45.3%)、病弱・身体虚弱3件(4.7%)、発達障害10件(15.6%)、障害名不明3件(4.7%)であった(図4-1)。

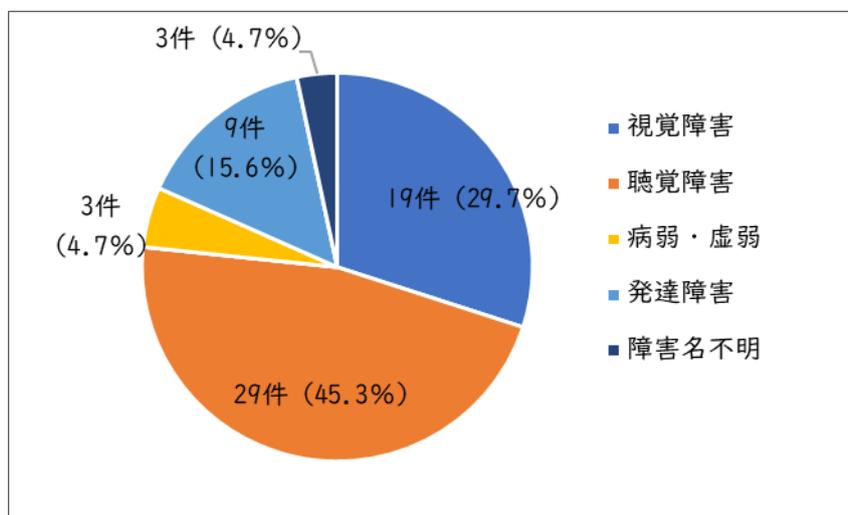


図4-1 支援件数とその割合

担当している授業で障害のある学生へ行った配慮についての結果を図 4-2～図 4-5 に示す。視覚障害のある学生へ行った配慮は、「教材の拡大(10 件)」が最も多く、続いて「教材のテキストデータ化(9 件)」、「教室内座席配慮(8 件)」と続いた(図 4-2)。

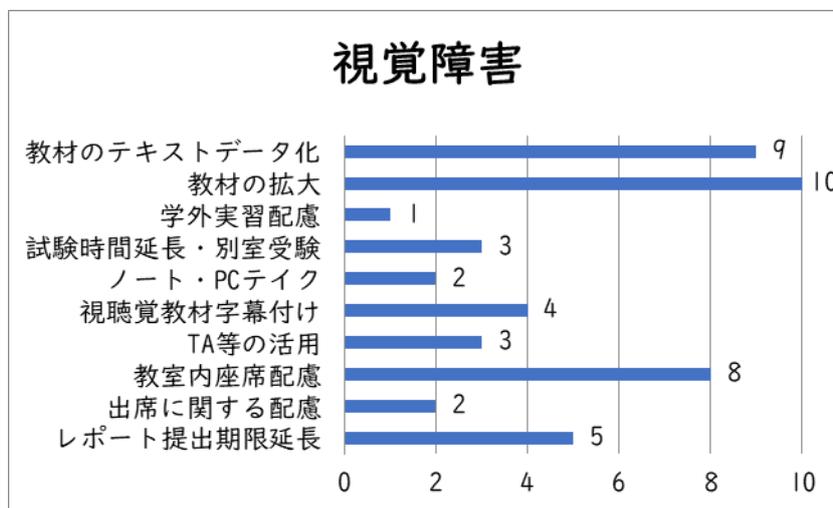


図 4-2 視覚障害のある学生へ行った配慮

聴覚障害のある学生へ行った配慮は、「ノート・PC テイク(9 件)」が最も多く、続いて「視聴覚教材字幕付け(8 件)」、「FM 補聴器/マイク使用(8 件)」、「その他(8 件)」が多く「その他」の内容としては、重要事項の文字化、視聴覚教材の文字起こし資料やパワーポイント読み原稿の提供などがあつた(図 4-3)。

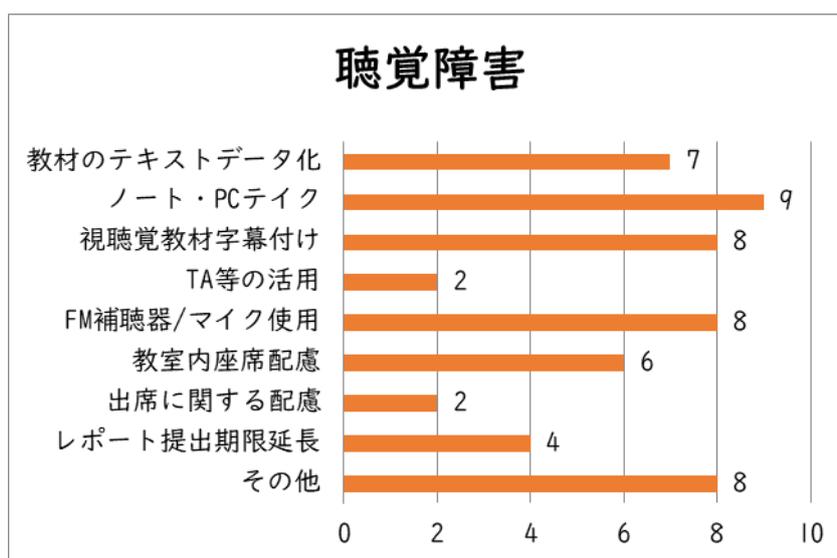


図 4-3 聴覚障害のある学生へ行った配慮

発達障害のある学生へ行った配慮は、「その他(3件)」が最も多く、配慮内容としては、使用教材の事前送付や重要事項の文字化などであった(図4-4)。

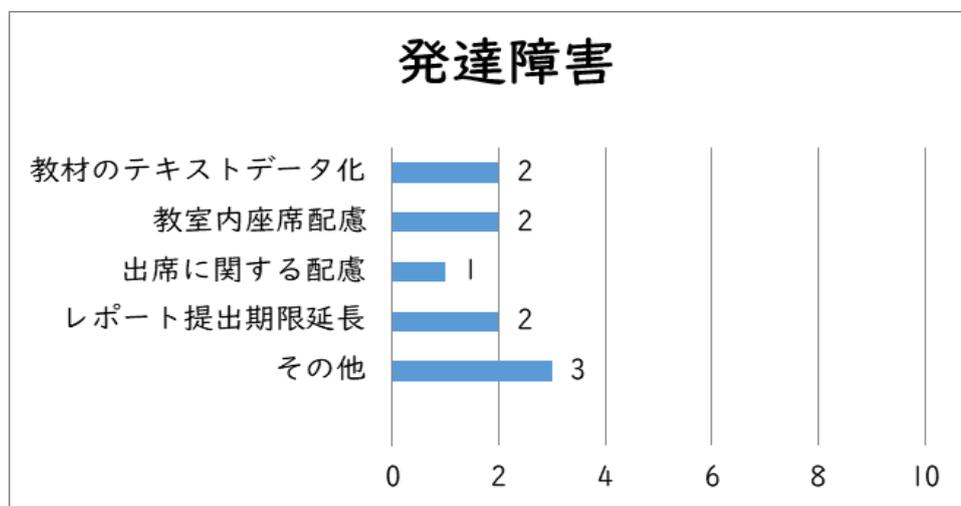


図4-4 発達障害のある学生へ行った配慮

病弱・虚弱の学生および障害名不明の学生へ行った配慮は、「出席に関する配慮(2件)」や「レポート提出期限延長(2件)」であった(図4-5)。

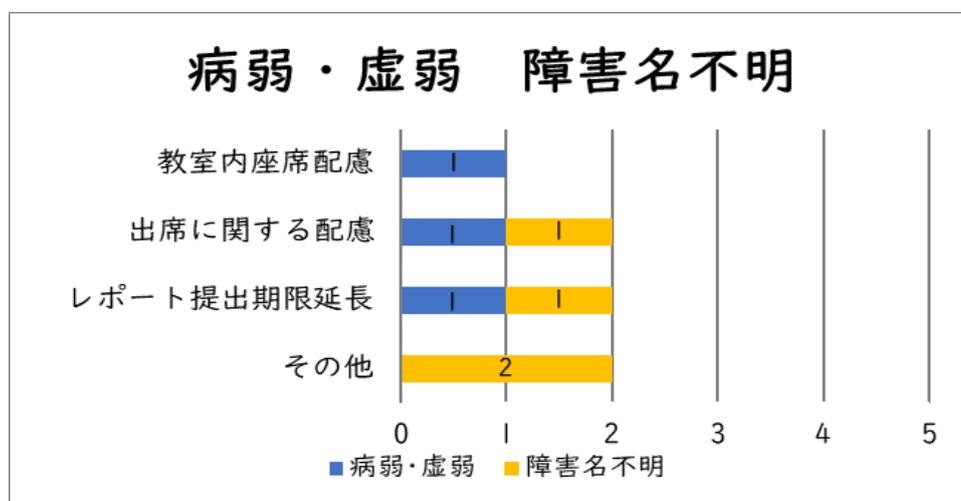


図4-5 病弱・虚弱の学生および障害名不明の学生へ行った配慮

以上の結果から、「教材のテキストデータ化」は聴覚障害のある学生だけでなく、視覚障害や発達障害のある学生への支援として共通して行われ、「レポート提出期限延長」については障害種に関わらず全体的に行われた。

「問② 障害学生支援センターが提供している支援(パソコンテイク, 字幕挿入, 情報提供等)は適切であったと思いますか。」

上記について尋ねたところ、図 4-6 のような結果が得られた。回答者全体では、「とてもそう思う」が 17 名、「少しそう思う」が 2 名と、障害学生支援センターで行っている配慮に一定の評価が得られたと考えられる。

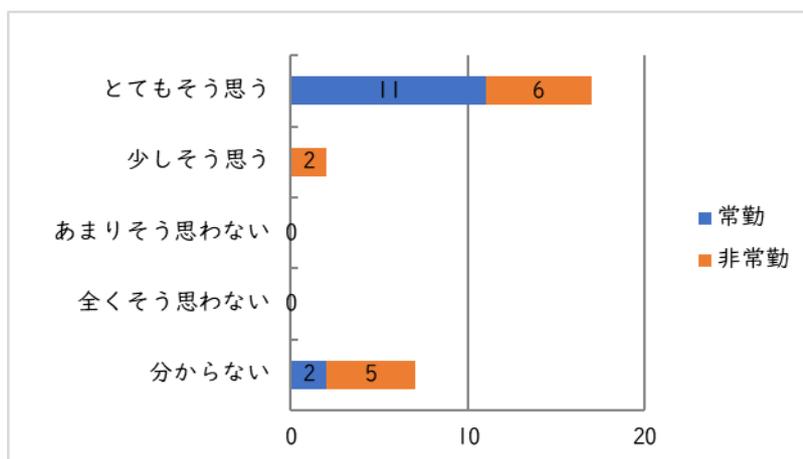


図 4-6 障害学生支援センターが提供した支援は適切だったと思うか

「問③ 障害のある学生への配慮は授業の達成目標という観点から見て十分だと思いますか。」

上記について尋ねたところ、図 4-7 のような結果が得られた。回答者全体では、「とてもそう思う」が 16 名と最も多く、次いで「少しそう思う」が 9 名、「分からない」が 2 名であった。

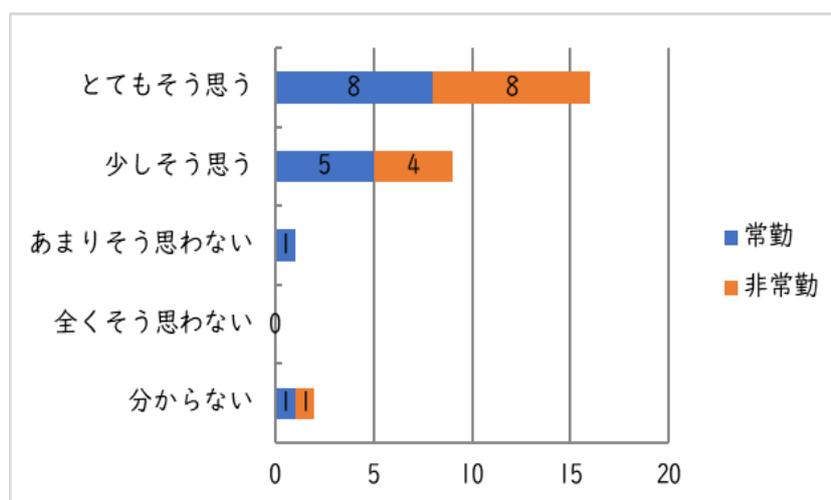


図 4-7 障害のある学生への配慮は授業の達成目標という観点から見て十分だと思うか

「問④ 障害のある学生に授業を行うことで授業のユニバーサル化が進んだと思いますか。」

上記について尋ねたところ、図 4-8 のような結果が得られた。回答者全体では、「少しそう思う」が 15 名と最も多く、次に「とてもそう思う」が 4 名であった。一方、「あまりそう思わない」、「全くそう思わない」と回答した人数は 2 名であった。

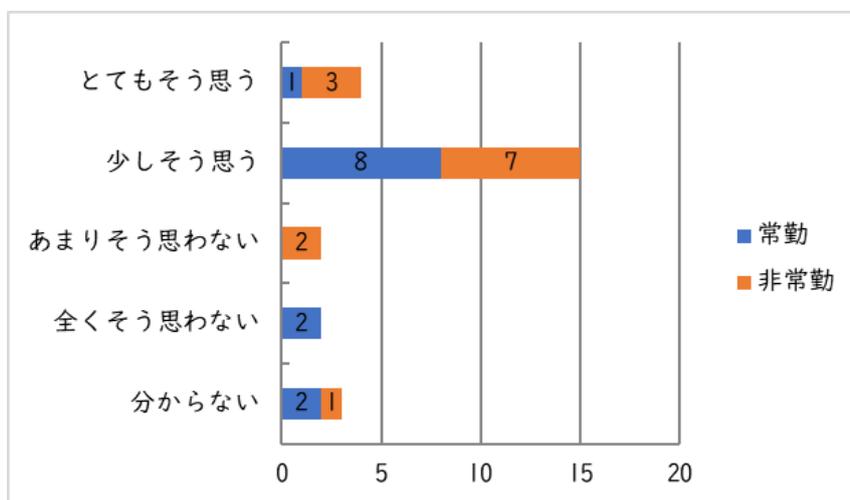


図 4-8 障害のある学生に授業を行うことで授業のユニバーサル化が進んだと思うか

「問⑤ 障害のある学生へ授業を行っていくうえで FD が必要だと思いますか。」

上記について尋ねたところ、図 4-9 のような結果が得られた。回答者全体では、「とてもそう思う」が 9 名、「少しそう思う」が 15 名、「あまりそう思わない」が 2 名、「全くそう思わない」が 1 名であった。

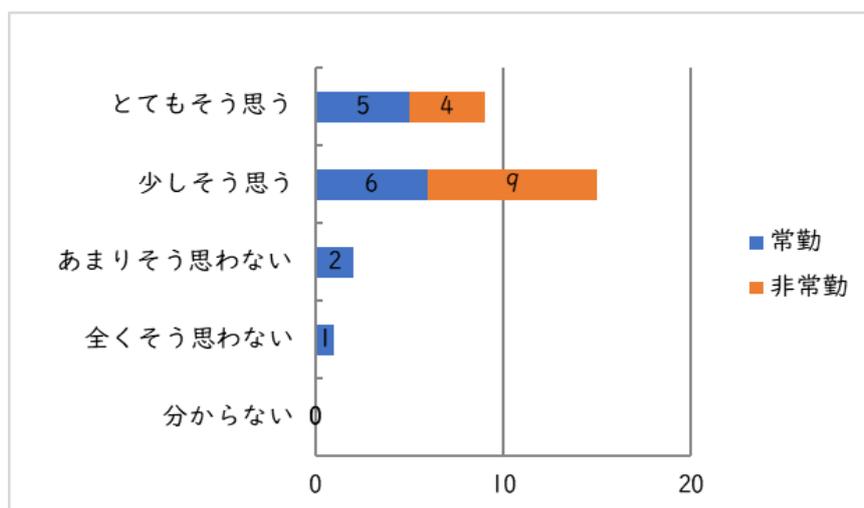


図 4-9 障害のある学生へ授業を行っていくうえで FD が必要だと思うか

「問⑥ 障害のある学生への支援についてうまくいったと思いますか。」

上記について尋ねたところ、図 4-10 のような結果が得られた。回答者全体でみると「とてもそう思う」が 7 名、「少しそう思う」が 13 名、「あまりそう思わない」が 4 名、「分からない」が 2 名であった。授業を行うにあたってうまくいったと考えている授業担当教員がいる一方、あまりそう感じていない教員も一定数存在した。

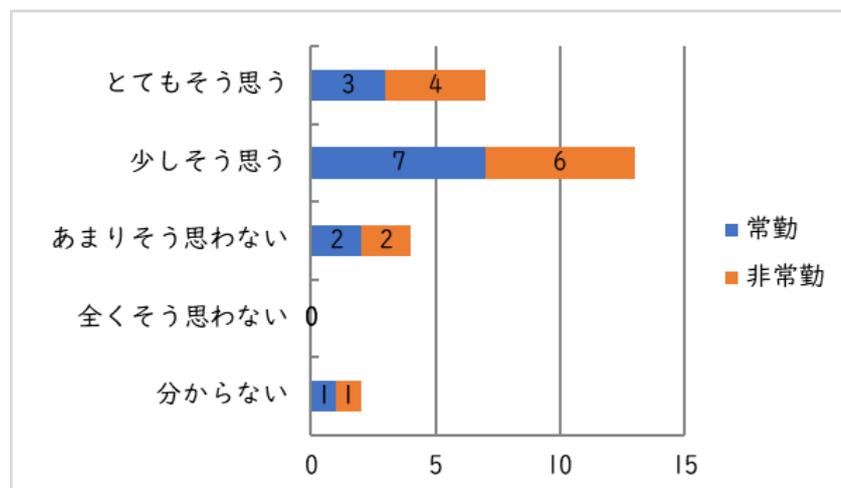


図 4-10 障害のある学生への支援についてうまくいったと思うか

「問⑦ 障害のある学生が自分の必要な配慮事項について主体的に先生方に伝えたいと思いますか。」

上記について尋ねたところ、図 4-11 のような結果が得られた。「とてもそう思う」が 6 名、「少しそう思う」が 7 名、「あまりそう思わない」が 7 名、「全くそう思わない」が 3 名であった。学生に対して授業の初回に配慮依頼文書を説明するよう指導を行っており、引き続き指導を行う必要性が示唆された。

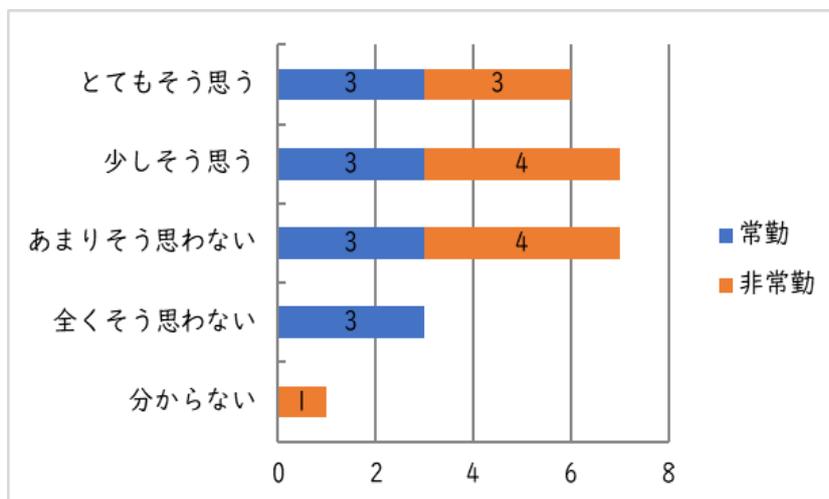


図 4-11 障害のある学生が自分に必要な配慮事項について主体的に伝えていたか

「問⑧ 障害学生支援センターより送付した障害のある学生への配慮依頼文書は十分に理解されましたか。」

上記について尋ねたところ、図 4-12 のような結果が得られた。「とてもそう思う」と回答した教員が 15 名、「少しそう思う」が 9 名であり、「あまりそう思わない」が 1 名、「分からない」が 2 名であった。障害学生支援センターより送付している障害のある学生への配慮依頼文書について、授業担当教員より概ね理解が得られたと考えられる。

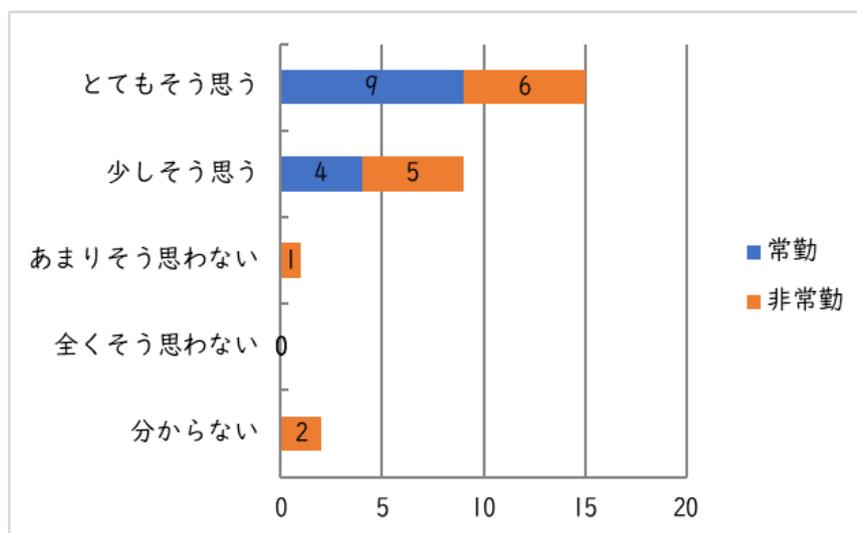


図 4-12 配慮依頼文書は十分に理解できたか

本アンケート調査の結果から、授業担当教員は概ね障害のある学生への配慮依頼文書を理解し、授業において配慮を行っていると考えられた。今後は、授業担当教員と配慮を希望する学生が互いに配慮事項について確認や説明を行う方法について検討する必要がある。

5. 障害学生支援センター 令和4年度スケジュール

令和4年4月～令和5年3月

令和4年			
4月	5日	入学式にて 手話通訳(福岡県手話の会連合会)、PC テイカー(支援学生)派遣	
	上旬	前期授業配慮願い作成・提出	
5月	中旬	フレッシュマンセミナーにて障害学生支援センターについて周知	
6月	21日	近隣の私立大学との意見交換会の実施(オンライン)	
8月	上旬	利用学生の前期授業の振り返り及び後期授業に向けた配慮内容の聞き取り	
	26日	九州地区国立大学法人障害者支援に関する大学間連携プログラムへの参加(オンライン)	
9月	下旬	後期授業配慮願い作成・提出	
12月	16日	九州地区国立大学法人障害者支援に関する大学間連携情報交換会への参加	
令和5年			
1月	19日	障害学生支援大学長連絡会議への参加(オンライン)	
	26日	令和4年度全学FDセミナー・研修会の実施(ハイフレックス)	
	下旬～	利用学生の後期授業の振り返り及び次年度に向けた配慮内容の聞き取り 「障害学生支援に関する授業担当教員アンケート調査」の実施	
2月	21日	近隣の私立大学との意見交換会の実施(オンライン)	
3月	24日	卒業式・修了式にて 手話通訳(福岡県手話の会連合会)、PC テイカー(支援学生)派遣	